



高橋春義 Takahashi Haruyoshi
代表取締役社長

愛社精神は、人に感動を与え 感謝されることで培われる

タカヨシの朝は元氣から始まる。内外の清掃、ラジオ体操、朝礼……、そんな社員たちの姿を温かく見守る高橋社長の経営哲学は、「とにかく貧乏でした」と言う少年時代、戦前からの激動の人生で培われた「至誠通天」だった。

取材・文 早坂隆
撮影 鷹野晃

text by Takeshi Hayasaka
photographs by Awa Takano

小学生のとき、将来の希望する職業を書く作文に、迷わず「父の仕事」と記した

「早起きは三文の徳」という。

江戸時代、奈良の地において、鹿を殺すと三文の罰金が課せられていた。そのため、住人は朝早く起きて、家の周囲に鹿の死骸がないかを確かめた。もしあれば片付けねばいけなかったが、このことから先の諺が生まれたといわれている。ちなみに、英語には「The early bird catches the worm. (早起きの鳥は虫を捕まえる)」という表現がある。洋の東西を問わず、朝の時間の有用性は古来より説かれてきたが、実践するのは容易ではない。困難だからこそ、それを戒める諺ができる。

午前七時半過ぎ、株式会社タカヨシの本社前に

着いたが、聞けば外の清掃はもう終了したという。出社前に自主的にやってきた社員さんたちは、すでに社内の清掃へとりかかっていた。すみやかに清掃を終えるとラジオ体操が始まり、朝礼へと流れる。セクシオンごとの朝礼は毎朝、全体朝礼は週に一回の頻度で行なわれる。東京営業本部とテレビ回線で繋がれた全体朝礼では、握手、服装検査、点呼、ハイ訓練、そして「タカヨシフィロソフィー」と名付けられた冊子の輪読などが行なわれる。タカヨシの朝は、元氣から始まる。

代表取締役社長、高橋春義は、そんな社員たちの姿を、厳しくも、温かいまなざしで見つめている。大正十五年、新潟市に生まれた高橋春義は、少年期を、「とにかく貧乏でした」と振り返る。父親の義男は、紙袋の製造販売を



吹き抜け天井ガラス張りの正面玄関ロビー



社内を速く歩く癖をつけるために設けられたコーナー

行なう「与板屋 高橋義男商店」を創立し、営んでいた。当初は順調に売り上げを伸ばしたが、昭和初頭の大不況により倒産。一家の生活も苦しいものに転じた。父親は一人で製本の仕事を続け、一家はなんとか糊口を凌いだ。ときには自宅に借金取りが来る。それでも春義は父を恨むことはなかった。それどころか、父は常に尊敬の対象であった。小学生のとき、将来の希望する職業を書く作文に、迷わず「父親の仕事」と記した。

「どうしてそう書いたのかよく覚えていません。そう書いたことは覚えてますけどね。不思議なものです」

**日本の戦後復興とともに、
会社の業績も伸び、
生活も徐々に安定していった**

昭和十四年、新潟市に県立の工業学校が創設された。それまで新潟商業学校に進むつもりだった春義だが、父親の意向により、工業への道を選んでいくこととなる。日中戦争下、義男は「これからの会社の業績も伸び、生活も徐々に安定していった。」

**父の死で落ち込む春義に対し
母はつらい気持ちを隠し
経営者の生き方を教えた**

当時のことを春義はこう語る。「とにかく必死でしたよ。がむしゃらです。小さいときから貧乏で苦労しましたから、とにかくお金が欲しかった。正直に言えば、そういうことです。そこには理念とか何だとか、そんなことは考えたこともなかった。貧乏を知っているから貧乏が嫌で、だから会社を絶対に潰してはいけない、と。そんな思いだけでした」

仕事の幅も広がる。雑誌の製本、白玉粉を入れる紙袋の製造。業界での信用も得た。

昭和三十四年、父・義男が直腸がんにより逝去。教えて七十四歳だった。落ち込む春義に対して、母・キミはこう言い放つ。「いくら泣いても死んだ者が浮かばれるか」

強い母だった。泣いて下を向いている暇などない。母は自らのつらい気持ちを隠し、経営者の生き方を子に教えた。

昭和三十五年、法人化して高義紙業株式会社となった。父親が「与板屋 高橋義男商店」を開店して以来、ちょうど四〇年目のことである。

昭和四十一年には新工場、さらに、昭和四十七

時代は商業ではなく工業の時代」と考えていたようである。

こうして新潟工業での第一期生としての生活が始まったわけだが、日本社会は大きな試験の歴史の中にある。昭和十六年に対米英戦争が始まると、春義の人生もそれに呑まれていくのは必然であった。

昭和十八年十二月、「卒業短縮」となり、予定よりも早く卒業。日本光学に就職することとなった。新潟を出て神奈川県溝口の工場での日々が始まったが、戦況は極度に悪化しており、本土空襲が日に日にひどくなった。溝口一帯が焼けることはなかったが、本所・深川一帯が焼かれた光景は、今も胸に焼き付いている。

放つおいても召集で入隊するわけだが、春義は志願して海軍の特別幹部候補生に合格。昭和二十年五月に舞鶴の海兵団に入団した。

「今からでは想像つかないと思いますが、そういう時代ですからね。僕が入隊しましたよ。しかし、入つてみたらガツクリしました」

春義はそう言うて笑う。

訓練は厳しく、体調を受けたこともあったが、特別幹部候補生ということでも、「ひどい」し「き」まではなかった。生活のなかの規律、忍耐力などは、軍隊生活のなかで身に付いた。

昭和二十年八月十五日、練兵場で玉音放送を聴く。雑音がうるさく、何を言っているのかよく聞き取れなかったという。

戦後、春義の新たな生活が始まった。

社会は混沌としていたが、追い風もあった。東京の印刷所や製本所の多くが空襲の被害を蒙ったため、その注文が戦災に遭わなかった地方に殺到したのだ。新潟の印刷業界はにわかには活気づいた。

春義は日本光学を辞め、父親の製本の仕事を手



社内各所にスローガンや目標が張られる



1997年から始めたTOC大会優勝チームと優秀な人に贈る金バッジ社員は掲示する



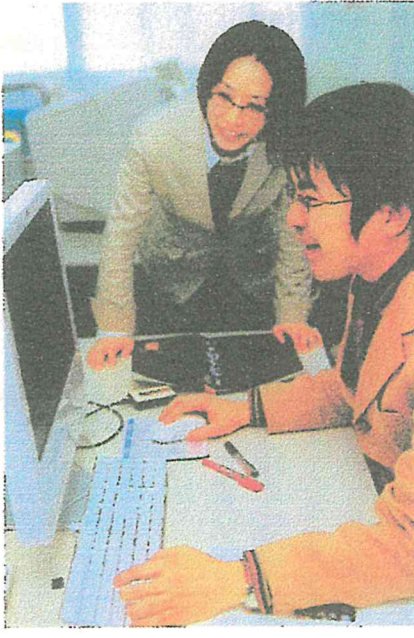
寄せられるクレームは「金の卵」ととらえている



生産枚数全国第2位のラベル印刷



インクの色を作り出すコンピュータシステム



頭脳集団の企画部



その場でパッケージサンプルを作るCADシステム



顧客の要求を形にする製作部



タカヨシの独自性のひとつである校正課



社員の靴を磨く石川取締役営業本部長(右)と社員



素手でトイレ清掃を毎朝行なう



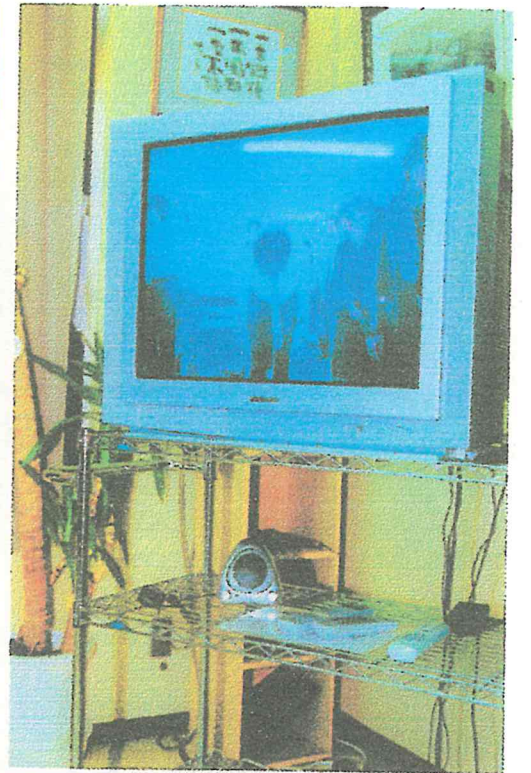
玄関を磨く工藤取締役管理本部長と社員



毎週火曜日に行なわれる全体朝礼



社員と経営理念を唱和



朝礼はテレビで繋がる東京営業本部門一揃い



朝礼は周りの人との握手から始まる

一流を目指すとともに、「新潟」が「日本」となり、今年から「世界」に変わった

こうして、朝の六時から八時まで、月三回の勉強会が始まった。塾のメンバーによる年に二回の合

「社員の一割が変われば、会社は変わる」
中村会長の言葉に感動し、すぐに「社長と共に経営を考え勉強する」タカヨシ塾を立ち上げ、自主的に手をあげた二三名が集った。

社内には「タカヨシ塾」という勉強会がある。その契機は平成九年にさかのぼる。東日本ハウスの中村功元会長が主宰していた「志功塾」に参加したのがきっかけだった。

「社員の第一、会社は顧客満足が第一。私はこんな風に思っています」

社内には「タカヨシ塾」という勉強会がある。その契機は平成九年にさかのぼる。東日本ハウスの中村功元会長が主宰していた「志功塾」に参加したのがきっかけだった。

「社員満足がなければ顧客満足もない。」
「会社としては顧客満足を求めます。しかし、社長として求めるのは社員満足です。社長は社員満足が第一、会社は顧客満足が第一。私はこんな風に思っています」

「愛社精神というものは、人から感動される、感謝されるといったことで培われていくものだとかかりました。いくら私が『いい会社だ』と連呼しても駄目。そうではなく、外部から評価されれば、そこから愛社精神が生まれていくのです」

「社員満足がなければ顧客満足もない。」
「会社としては顧客満足を求めます。しかし、社長として求めるのは社員満足です。社長は社員満足が第一、会社は顧客満足が第一。私はこんな風に思っています」

「愛社精神というものは、人から感動される、感謝されるといったことで培われていくものだとかかりました。いくら私が『いい会社だ』と連呼しても駄目。そうではなく、外部から評価されれば、そこから愛社精神が生まれていくのです」

「愛社精神というものは、人から感動される、感謝されるといったことで培われていくものだとかかりました。いくら私が『いい会社だ』と連呼しても駄目。そうではなく、外部から評価されれば、そこから愛社精神が生まれていくのです」

「愛社精神というものは、人から感動される、感謝されるといったことで培われていくものだとかかりました。いくら私が『いい会社だ』と連呼しても駄目。そうではなく、外部から評価されれば、そこから愛社精神が生まれていくのです」

「愛社精神というものは、人から感動される、感謝されるといったことで培われていくものだとかかりました。いくら私が『いい会社だ』と連呼しても駄目。そうではなく、外部から評価されれば、そこから愛社精神が生まれていくのです」

「愛社精神というものは、人から感動される、感謝されるといったことで培われていくものだとかかりました。いくら私が『いい会社だ』と連呼しても駄目。そうではなく、外部から評価されれば、そこから愛社精神が生まれていくのです」

「愛社精神というものは、人から感動される、感謝されるといったことで培われていくものだとかかりました。いくら私が『いい会社だ』と連呼しても駄目。そうではなく、外部から評価されれば、そこから愛社精神が生まれていくのです」

「愛社精神というものは、人から感動される、感謝されるといったことで培われていくものだとかかりました。いくら私が『いい会社だ』と連呼しても駄目。そうではなく、外部から評価されれば、そこから愛社精神が生まれていくのです」

「愛社精神というものは、人から感動される、感謝されるといったことで培われていくものだとかかりました。いくら私が『いい会社だ』と連呼しても駄目。そうではなく、外部から評価されれば、そこから愛社精神が生まれていくのです」

「愛社精神というものは、人から感動される、感謝されるといったことで培われていくものだとかかりました。いくら私が『いい会社だ』と連呼しても駄目。そうではなく、外部から評価されれば、そこから愛社精神が生まれていくのです」



商品を紹介するショールーム

会社概要

社名 株式会社タカヨシ
 所在地 事業本部・工場：〒950-0141 新潟県新潟市江南区亀田工業団地1丁目3番21号
 電話 025-381-2000(代表)
 資本金 6,000万円
 代表者 代表取締役社長 高橋春義
 従業員数 144名 ※2008年4月1日現在
 事業内容 商業印刷/ラベル印刷、広告・VTR制作ほか

会社沿革

大正9年 新潟市で紙製品製造販売業を開業
 昭和35年 高橋紙業株式会社に法人化
 昭和61年 株式会社タカヨシに社名変更
 平成16年 経済産業省主催「IT経営百選」最優秀賞受賞

text by

はやさか・たかし
 1973年生まれ。愛知県岡崎市出身。ルポライター。旅行雑誌の編集を経てフリーのライターに。主な著作に『ルーマニア・マンホール生活者たちの記録』(現代書館)、『世界の日本人ジョーク集』(中公新書ラクレ)など。その他、日中戦争、太平洋戦争関連の取材を続けている。ライフワークは世界のジョーク収集。

photographs by

たかの・あきら
 1960年生まれ。札幌市出身。フリーカメラマン。主として人物ポートレート、旅の撮影を雑誌や企業PR誌などを中心に活動。近著に『夕暮れ東京』(淡交社)がある。

「企業で一番いけないことは潰すこと」
 そのためには「初心を忘れないこと」の大切さを常に意識している。いくら立派な理念を掲げても、タカヨシでは、一〇〇年生き残る企業を目指す。
会社の規模は父の時代よりも大きくなった。しかし、父を追い越してはいない
 「その後、一流を目指すことも、『新潟一』が『日本一』となり、さらに、目的として『日本一』の挨拶『日本一の社風』という理念を位置づけた。
 「今は日本一の社風を目指して頑張っています。このことは社員さんたちにもしっかりと共有されています。今年からは『日本一』が『世界一』という言葉にまた変わっている。
 「これは退職者の履歴書のファイルです。なかには、すぐに辞めてしまった人もいます。気に入らない辞め方をしていた人もいます。ときには「辞めた人間とつきあうな」なんて悪口を言ったこともありますよ。でも、今ではそんな人たちにも感謝しているんです。その人たちがたまたまその一時期であったにせよ、間違いなく会社を支えてくれたわけですから。会社が潰れていたのなら別ですよ。でも、潰れてはいないわけですからね。この人たちがいたから今の会社がある。すべての人に感謝です」
 「出会ったすべての人に感謝」とはよく言われる言葉だ。しかし、実践することは難しい。理念の実践が目の前のファイルに凝縮し、結実していた。

時間の流れとともに、それが風化してしまつては害しか残さない。
 「利益の追求よりもしあわせの共有です」
 そう語る社長にブレはない。
 インタビュ어의終盤、社長は一冊の分厚いファイルを見せてくれた。背には「我が社の歴史を支えてくれた人々」と記されている。
 「これは退職者の履歴書のファイルです。なかには、すぐに辞めてしまった人もいます。気に入らない辞め方をしていた人もいます。ときには「辞めた人間とつきあうな」なんて悪口を言ったこともありますよ。でも、今ではそんな人たちにも感謝しているんです。その人たちがたまたまその一時期であったにせよ、間違いなく会社を支えてくれたわけですから。会社が潰れていたのなら別ですよ。でも、潰れてはいないわけですからね。この人たちがいたから今の会社がある。すべての人に感謝です」
 「出会ったすべての人に感謝」とはよく言われる言葉だ。しかし、実践することは難しい。理念の実践が目の前のファイルに凝縮し、結実していた。

現在、八十二歳の高橋春義社長。その夢はまだ終わらない。社是に掲げている「至誠通天」は、社長の人そのものを表している。
 「今でも両親を尊敬しています。うちの親父は嘘をついたことがない。だから『至誠通天』は父の生き方でもあるわけです」
 常務取締役の中山英子は、春義を評して言う。
 「嘘をつかない人。いや、つけない人ですかね」
 隠し事をしない。かけひきもしない。できない。しかし、それでいいと本人も、幹部も思っている。
 「まだまだ未熟者。未熟も未熟、これからですよ」
 春義はそう言つて軽やかに笑う。
 会社の規模は大きくなった。父の時代よりもずっと大きくなった。しかし、春義はこう思っている。
 「親を追い越したとは思えません。両親のおかげで今の私があります。そのことに心から感謝しています」
 戦前、自分の夢を「父親の仕事」と作文に記した少年は、今もその夢のなかにいる。

「新潟一の印刷会社になろう」
 かつてそんな言葉を掲げたことがある。しかし、春義はふと考えた。
 「一番って何だろう？ 何の一番を目指すのか？ 設備か、売り上げか、従業員数か。春義はこんな言い方に変えた。
 「一番よりも一流になろう、と。一番には限度がありますからね。しかし、一流には限界がない。自分の仕事で一流になろうじゃないか。社員さんにはこう言い始めました」
 その後、一流を目指すことも、『新潟一』が『日本一』となり、さらに、目的として『日本一』の挨拶『日本一の社風』という理念を位置づけた。
 「今は日本一の社風を目指して頑張っています。このことは社員さんたちにもしっかりと共有されています。今年からは『日本一』が『世界一』という言葉にまた変わっている。
 「これは退職者の履歴書のファイルです。なかには、すぐに辞めてしまった人もいます。気に入らない辞め方をしていた人もいます。ときには「辞めた人間とつきあうな」なんて悪口を言ったこともありますよ。でも、今ではそんな人たちにも感謝しているんです。その人たちがたまたまその一時期であったにせよ、間違いなく会社を支えてくれたわけですから。会社が潰れていたのなら別ですよ。でも、潰れてはいないわけですからね。この人たちがいたから今の会社がある。すべての人に感謝です」
 「出会ったすべての人に感謝」とはよく言われる言葉だ。しかし、実践することは難しい。理念の実践が目の前のファイルに凝縮し、結実していた。



「タカヨシの母」中山英子常務取締役



社長の右腕、流通信雄代表取締役専務